

令和5年度 第1回宮城県産業教育審議会会議録

宮城県教育委員会

- I 日時 令和5年10月23日（月）
午後2時から午後4時まで
- II 会場 宮城県 行政庁舎 特別会議室
仙台市青葉区本町3丁目8-1

III 次第

- 1 開 会
- 2 委嘱状の交付
- 3 開会挨拶
- 4 議 事
 - (1) 令和4年5月宮城県産業教育審議会答申について
答申「今後の産業教育の在り方について」
 - (2) 専門高校・専門学科の現状について
 - (3) 専門高校・専門学科の今後の在り方
 - (4) その他
- 5 その他
今後の審議会スケジュールについて
- 6 閉 会

【資料一覧】

- | | |
|-----|--|
| 資料1 | 産業教育振興法（抜粋）
産業教育審議会条例・産業教育審議会規則
情報公開条例（抜粋） |
| 資料2 | 令和4年5月答申「今後の産業教育の在り方について」 |
| 資料3 | 専門高校・専門学科の取組状況報告 |
| 資料4 | 公立高等学校出願倍率および進路状況 |
| 資料5 | 第3期県立高校将来構想 第2次実施計画 |
| 資料6 | 本県の中学校卒業生数推移について |
| 資料7 | 専門高校・専門学科の配置状況 |
| 資料8 | 今後の審議会スケジュールについて |
| 資料9 | 産業教育審議会意見用紙 |

[別資料]

- ・宮城県産業教育審議会委員名簿

(進行)
事務局 伊藤総括

会に先立ちまして、本日の資料並びに日程の確認をさせていただきます。本日お配りしております資料は、表紙に次第があります会議関係の綴り1冊でございます。表紙をめくりますと、本日の座席表、審議委員名簿に続きまして、右肩に四角囲みで資料番号が振っております。資料の内容については、表紙に記したとおりになっております。

追加資料として「オガーレ! ACE 9月号」、「宮城県立高等技術専門校の入学案内パンフレット」、「高技専再編整備基本計画の概要」を経済商工観光部が準備してくださっています。

本日の日程は、配布しております次第のとおりでございます。終了時刻は午後4時を予定しておりますので、よろしくお願いたします。

なお、本審議会は情報公開条例19条により公開となりますので、よろしくお願いたします。

1 開 会
(進行)
事務局 伊藤総括

改めまして、委員の皆様、本日は御多用のところ御出席いただきまして、大変ありがとうございます。それでは、令和5年度第1回宮城県産業教育審議会を開催いたします。

2 委嘱状の交付
(進行)
事務局 伊藤総括

本日は、今年度初めての審議会となります。はじめに、審議会委員をお引き受けいただきました皆様に委嘱状を交付させていただきます。本来ならば、お一人お一人にお渡しすべきところがございますが、委嘱状を机の上に置かせていただきまして、各委員のお名前を御紹介申し上げることによって交付に代えさせていただきます。

事務局 関

それでは、お手元の名簿順に委員の皆様のお名前を読み上げさせていただきます。

- ・宮城県商工会議所連合会 常任幹事 今野 薫 委員です。
- ・宮城県中小企業団体中央会 専務理事 半沢 章 委員です。
- ・宮城県漁業協同組合女性部連絡協議会 会長 三浦 弘子 委員です。三浦委員は、本日欠席でございます。
- ・宮城県農業協同組合中央会 常務理事 高橋 慎 委員です。
- ・宮城県専修学校各種学校連合会 副会長 加藤 雄一 委員です。加藤委員は、本日欠席でございます。
- ・東北大学大学院農学研究科 教授 伊藤 房雄 委員です。
- ・宮城学院女子大学現代ビジネス学部 准教授 佐藤 千洋 委員です。
- ・宮城教育大学教育学部 准教授 山内 明美 委員です。山内委員はもう少ししたらいらっしゃると思います。
- ・東北福祉大学総合福祉学部 准教授 後藤 美恵子 委員です。
- ・東北大学金属材料研究所 教授 梅津 理恵 委員です。梅津委員は、本日欠席でございます。
- ・宮城県経済商工観光部 副部長 小嶋 淳一 委員です。
- ・宮城県高等学校長協会より宮城県泉松陵高等学校 校長 徳能 順子 委員です。

以上12名の皆様となっております。どうぞよろしくお願いたします。

3 開会挨拶
(進行)
事務局 伊藤総括

次に宮城県教育委員会教育長 佐藤 靖彦が開会の御挨拶を申し上げます。

佐藤靖彦教育長

宮城県教育委員会教育長の佐藤でございます。どうぞよろしくお願いたします。令和5年度第1回宮城県産業教育審議会の開催にあたりまして、一言御挨拶

挨拶申し上げます。

委員の皆様におかれましては、御多用のところお集まりいただきましてありがとうございます。また、日頃より本県産業教育の充実・発展のために御支援・御協力を賜っていることに対しまして、重ねて感謝申し上げます。

さて、令和4年5月の本審議会より、今後の産業教育の在り方について専門的な見地から令和4年度答申を頂戴いたしました。県教育委員会といたしましては、答申を受け、地域や産業界の要望も踏まえながら、その具現化へ向けて様々な施策を推進し、社会で活躍できる人材を育成することに注力していかなければならないものと考えております。

さらに最近では、少子化による若手の人材不足や技術の伝承の不足など、産業を担う人材育成の必要性が、新聞等を賑わせております。教育界では、ICTを活用した授業の構築のほか、自らの生き方・在り方を考えながら教科を横断して探究的な見方・考え方を活かす「総合的な探究の時間」や「課題研究」といった授業を進めておりますが、デジタル化・グリーン化の世界的な流れは非常に早く、どのような産業構造の変化にも対応できる有為な人材育成が求められているところではあります。

本審議会では、答申を受けての各校の取組を報告させていただくとともに、「加速する少子化を踏まえた専門高校・専門学科の在り方について」をテーマに、更に踏み込んで、専門性を維持しながらの専門高校・専門学科の在り方や多様な学びの在り方について御審議いただき、令和6年度末を目途に提言を頂戴したいと思っております。限られた時間ではございますが、委員の皆様には本県教育の一層の充実のため、この喫緊の課題につきまして様々な角度から忌憚のない御意見をいただきますようお願い申し上げます。開会にあたっての挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

(進行)
事務局 伊藤総括

ここで教育委員会の主な出席者を紹介させていただきます。

- ・宮城県教育委員会教育長 佐藤 靖彦でございます。
- ・宮城県教育庁高校教育課長 遠藤 秀樹でございます。

次に、産業教育審議会規則第4条に基づき、審議会の会長および副会長を委員の互選により定めることになっておりますが、いかがいたしましょうか。

特になければ事務局からの原案を示させていただいてよろしいでしょうか。

それでは事務局としての原案は、これまでに引き続き会長を伊藤房雄委員に、副会長を高橋慎委員をお願いしてはいかがでしょうか。

特に異議がないようですので、会長を伊藤房雄委員に副会長を高橋慎委員をお願いしたいと思います。

それでは、伊藤会長からご挨拶をいただきます。よろしくお願ひいたします。

伊藤房雄会長

ただいま本審議会の会長を仰せつかりました東北大学大学院農学研究科の伊藤でございます。会長就任にあたりまして一言御挨拶申し上げます。

本審議会は、宮城県の産業教育の振興を図るため、教育委員会からの諮問に応じて、産業教育に関する教育の内容や関連産業界との協力など、産業教育全般について審議し、提言や答申という形でお応えするものであります。直近では令和4年5月に「今後の産業教育の在り方について」とした答申を提出するなど本審議会の役割は極めて大きいものと言えます。

先ほど、佐藤教育長からもお話のありましたとおり、昨年度答申を提出したばかりではありますが、以前想定した以上に少子化が加速している現状を受け、喫緊の課題との認識を新たにしながら事務局から与えられた「少子化の下での専門高校・専門学科の在り方」というテーマに基づいて、委員の皆様と話を深めていきたいと考えております。

今回、新しく委員になりました皆様も、それぞれの専門性とこれまでの御経験を基に、遠慮することなく、この喫緊の課題につきまして様々な視点で建設的な御意見を賜りたいと思っております。

さて、コロナ禍が未だ収束していない中で、わが国を取り巻く環境は、ロシアとウクライナ、ハマスとイスラエルを主とする地政学的緊張、世界経済の鈍化など情勢が大きく動いており、先の見通しが立ちにくい現状が続いております。なかなか将来を見通せない中で、いかに安全・安心に、公教育、中でも産業教育を時代に合った形で盛り立てていくかは高校、大学の姿勢として問われているものと思います。また、生徒・学生のみならず佐藤教育長からのお話にもありましたとおり、若年技能者をいかに育成し、産業技術の継承をスムーズに進めていくことができるかは、宮城県の大きな課題であると気持ちを新たにいたしました。

委員の皆様には、将来の産業を支える人材育成の支援となるよう、それぞれ御専門の立場から忌憚のない御意見をお願いいたしまして挨拶いたします。どうぞよろしくようお願いいたします。

(進行)
事務局 伊藤総括

ありがとうございました。これより審議に入りますが、教育長は所用のため、ここで退席させていただきます。

以後の進行については、産業教育審議会規則第5条により会長が議長を務めることになっておりますので、ここからは伊藤会長にお願いしたいと思います。どうぞよろしくお願ひします。

議長 伊藤会長

ここから議長を務めさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。それでは、次第を御覧ください。4の議事(1)令和4年5月宮城県産業教育審議会答申「今後の産業教育の在り方」について、こちらについて、まず事務局から説明をお願いいたします。

事務局 関

事務局の高校教育課の関と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。私から令和4年5月答申「今後の産業教育の在り方」について、簡単に概要等を確認させていただきます。資料2と右肩に枠組みで書いてある資料の最後に概要版というものを挟み込みました。緑色の枠があるA3判の少し大きな資料になっております。こちらを御覧ください。

新しい委員もいらっしゃるため、簡単に確認をさせていただければと思っております。

「今後の産業教育の在り方」について諮問し、令和4年5月に答申をいただきました。答申では、本県産業教育の現状と課題を資料の左側のようにまとめ、令和10年までの中学校卒業生見込数推移を勘案しながら、「社会の変化に対応した人材育成」として、専門学科・専門高校で求められる基礎的・基本的な資質・能力、次代の産業を担う人材に必要なとされる資質・能力の2つを育成していくことを確認いたしました。また、産業界や異校種間交流などを促進し関係機関と学校を繋ぐための教員の指導力向上、産業教育に必要な施設設備についても答申をいただきました。

また、1つの学校だけで完結することなく、地域や産業界等との連携が必要であること、時代のニーズを踏まえた教育課程を編成し、社会の変化に柔軟に対応できる教育課程とすることや多様なツールを活用した情報発信で、専門高校・産

業教育を中学生や保護者に情報発信すること等の方策についても御意見を頂戴したところです。以上で簡単ではございますが、答申の説明といたします。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。今、確認したいことや皆さんから御意見、御質問があればと思いますが、いかがでしょうか。また、会の後半でも一括して受け付けたいと思いますが、先に進んでよろしいでしょうか。

ありがとうございます。それでは、続いて審議の(2)に移りたいと思います。(2) 専門学校・専門学科の現状について、こちらも事務局から説明をお願いいたします。

事務局 千葉

事務局の高校教育課の千葉と申します。よろしくお願いたします。私からは、専門高校・専門学科の取組状況について御報告いたします。資料3の専門学校・専門学科の取組状況報告を御覧ください。

令和4年5月に「今後の産業教育の在り方」についての答申を受け、社会の変化に対応した人材育成をはじめ、地域や産業界等との連携、専門高校・産業教育の理解促進を図るために、各校において様々な取組を行っているところでございます。

まず、資料の1ページから3ページは、令和4年度に実施いたしました「専門高校等の魅力発信イベント」の開催概要とイベント時の様子の写真になります。県内を6ブロックに分け、35校延べ235名の生徒の参加を得て実施いたしました。各校の生産物、製作物の販売や、開発した商品または企業とのコラボ商品の販売、プログラミングや機械加工の体験、手話体験などを通して各校とも専門高校での学びを、広く県民の皆様を紹介する機会とすることができました。

また、令和5年2月には体験発表会として各ブロックの様子を発表し、多くの方々へ専門高校の学びを知っていただく機会となりました。当審議会委員の後藤美恵子様からは御講評をいただき、生徒たちの自信や励みになるお話を頂戴しましたことに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

4ページからは、今年度の各校の取組について新聞記事として紹介されたものです。日々の学びの中で得てきた、専門的な知識や技術を活かし、地域や産業界等との連携をとおして各校とも素晴らしい活動をしております。1つ1つ御報告したいところですが、時間が限られておりますので、ぜひ目を通していただければと思います。

最後に10ページを御覧ください。令和4年度に実施しました「専門高校等の魅力発信イベント」については、みやぎ産業教育フェアのフィナーレとしての位置付けでの実施でございました。今後は、「専門教育次世代人材育成プロジェクト」として、新規事業を立ち上げ、地域とのコンソーシアム(地域や学校間連携)を構築し、地域を学びのフィールドとした教育活動をとおして、地域や産業界等との連携を図り、社会の変化に対応した人材育成や専門高校・産業教育の理解促進を進めているところでございます。現在は、生徒の具体の学びの方策や地域、協力機関の調整、年間スケジュールの検討等を行っており、事業の進捗については今後の審議会でご報告してまいりますので、委員の皆様から御助言をいただければと思います。

私からの報告は以上で終わります。

事務局 佐々木

続けて公立高等学校出願倍率及び進路状況について説明させていただきます。事務局の高校教育課の佐々木と申します。どうぞよろしくお願いたします。それでは資料4を御覧ください。

公立高等学校出願倍率及び進路状況についてまとめたものです。まず、公立高等学校出願倍率及び出願倍率の推移について表1にまとめております。普通科

の倍率を見ますと1倍を超える状況となっておりますが、8農業から14福祉までの職業に関する学科及び15総合学科の倍率を見ますと、年によって浮き沈みはありますが、看護科以外の学科については1倍を下回る状況が続いております。

また表2は、学科別卒業生数の推移をまとめたものですが、生徒数の減少に伴い、各学科の卒業生数も減少している状況が分かります。このように普通科に比べ志願者の確保が大きな課題となっており、少子化に伴い、今後さらにその傾向が強まることが予想されます。

続きまして、公立高等学校卒業生進路状況について御説明いたします。2ページを御覧ください。表3と図1は、学科別就職希望者の割合の推移をまとめたものです。職業に関する学科の卒業生は、普通科の卒業生と比べ、就職希望者の割合が多い状況となっております。しかし、福祉学科以外は、就職希望者の割合が減少傾向となっており、進学希望者の割合が増加している状況となっております。

表4は、学科別内定状況の推移についてまとめたものです。普通科と比べ、職業に関する学科は内定率が高い状況となっております。

表5、図2は就職地域比率の推移を表わしたものです。年によって僅かな増減はありますが、例年8割が県内、2割が県外の企業から内定をいただいている状況となっております。

表6、図3は、就職内定率の県内外比較です。県内外とも高い内定率となっておりますが、例年、県外の方が、わずかに内定率が高い状況となっております。

本県産業界においては、人口減少、少子高齢化に伴う地域産業の担い手不足が懸念される中、地域産業の維持・発展に貢献できる専門的な知識・技術を持った職業人を育成することが求められております。

このような状況であることから、加速する少子化を踏まえた専門高校・専門学科の在り方についてさらに踏み込んで、専門性を維持しながらの専門高校・専門学科の在り方や多様な学びの在り方について御審議いただき、提言を頂戴したいと存じます。公立高等学校出願倍率及び進路状況については以上です。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。ただいま事務局から答申後の各専門高校等の取組、それから入試出願倍率、進路状況について報告・説明がありました。このことについて皆さんから御意見、御質問等ございましたら、御発言をお願いいたします。

今回初めて委員になられた方もいらっしゃるので復唱いたしますが、資料2ですが、これが令和4年5月に本審議会でも答申した「今後の産業教育の在り方について」の内容になります。今日、すべてを理解するのは難しいと思いますので、お持ち帰りの上、お目通しいただければと思います。

その中で今回、新たに皆さんに御議論していただこうと思っていることに関してはA3判の資料2を御覧ください。こちらが先ほど事務局から説明いただいた「今後の産業教育の在り方について」の概要版です。見開いて左下に中学校卒業生見込数の推移があります。この推移の下で令和4年5月に「今後の産業教育の在り方」をいろいろ御検討いただき、内容を取りまとめ、答申とさせていただきます。ところが、これは令和10年までの推移をまとめているものです。令和3年から5年にかけて卒業生数が増加しましたが、令和5年から低下傾向になっており、令和9年から10年に、おそらくもう1回、上向きになるだろうという予測です。しかし、長期的に見れば、全体には右肩下がりで、実は資料6で示されていますが、令和11年以降の生徒数の減少が想定した以上に減少しそうだといったところが明らかになってきました。それを踏まえて、昨年のお答申を基にしながら、今後、急激に減少する生徒数、それに対して産業教育が今の答申のままではいいのかどうか、何か新たに付け加えたり、変更したりすべき内容

があるかどうかについて、今年度の産業教育審議会で、特に焦点を当てて検討していただきたいところと伺っております。それからA3版の資料のところの説明でも触れられておりましたが、昨年のお答申の中で、産業教育の面白さといったところが、入学してくれる潜在的な受験生、中学生やその保護者に対して十分に伝わっていないという意見が多数出ました。そのため昨年の答申の段階では、産業高校にいる生徒や教職員の皆さんが自分たちで、これから受験する中学生とその保護者に、産業教育の楽しさ、面白さをきちんと伝える情報発信の在り方に取り組む必要があるという内容の答申をさせていただきました。

それを踏まえて資料3の専門高校・専門学科の取組状況報告にあるように、県内の様々な産業高校で、その中学生や保護者向けに、こんなことをやっていますという情報を発信し、自らが取り組んでいる楽しさを伝える場を作っていたということになります。

こういったことに関して、後藤委員からも御協力いただきました。もし可能であれば徳能委員から、先生たちの間でこの取組がどのように受け止められたかの情報提供をしていただければと思います。資料3には、河北新報で取り上げていただいた内容について全部記載させていただいているとのことでした。

資料4は先ほど説明ありましたように、直近までの出願倍率と卒業生の推移や就職の内定率等の推移です。それらの情報提供といったことになります。私から、繰り返しになりましたが、簡単に概要説明させていただきました。

この中で、まだよく分からないと思う部分もあると思いますが、確認したい点や御意見がありましたら御発言をお願いしたいと思います。いかがでしょうか。もしなければ、徳能委員からよろしいでしょうか。

徳能委員

はい。私は今、産業教育の学校の所属ではないので、聞いたお話ということで成果についてお話しさせていただきます。令和4年度におこなわれた6ブロックに分かれてのイベントは、各地域とも大変盛況だったと聞いております。今までさんフェアは、勾当台公園1カ所でまとまって実施していたので、集客という面では各地域から来ることは難しかったのですが、令和4年度のイベントでは、各地域でおこないましたので、その地域の保護者や中学生が来ることができたのが良かったと皆さん思っていることを聞いておりました。

ただ残念なのは、このイベントは令和4年度だけで今年度はおこなわれていないということです。さんフェアが一旦その役割を終え、その最後のイベントとしての「魅力発信イベント」ということだったことは先ほども説明がありましたが、せっかく良い取組なので、このようなことを今後また立ち上げていかなければ、県内隅々まで産業教育のことを知っていただく機会というのはなかなか作れないのではないかと感じております。

また、来ていただく方々が情報を得るということ以上に、産業教育に在籍している生徒たちが、充実感や達成感というものをこのイベントをやりきることで持つことができるということも1つの大きな成果だと思っておりました。

あと1つだけよろしいでしょうか。産業教育の前回の審議会で中学校の先生方に理解していただくような取組が必要だという議論がありました。実は県工業高校は今年、中学校の先生方にお声がけをして、学校に実際来ていただく取組をおこなったということを知っていました。県工業高校は、工業高校ということで、施設設備などを見ていただきやすいと思います。それから生徒数を考えても、最初の取り掛かりとして、そのようなことをしていただく場所としては大変良かったのではないかと感じておりますが、工業だけの取組でしたので、他の学科においても、これから続いてやっていけるといいのではと思っておりました。以上でございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。遠藤課長からお願いします。

遠藤課長

ただいまの徳能委員のお話に若干付け加えさせていただきますと、県工業高校で中学校の先生方を対象にして、高校でどのような勉強ができるかということを紹介する取組をおこなっているということでございました。

その取組につきましては、県工業高校だけではなく、校長会の工業部会にて、こういう取組を進めていきたいと思いますということで行われたものです。

そのため今後、多くの学校に波及していくという可能性があります。また、工業の校長先生方と農業の校長先生方とも、同じような目線でこのような取組ができないかということで話し合いが持たれていることも伺っておりますので、そういった取組が今後、多くの学科に広がっていくことは期待されるかと思っております。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。今、徳能委員からもありましたが、昨年の答申の議論の中で、大学や各種専門学校のオープンキャンパス等、高校生が来たときに学生が自分たちの後輩に説明するところが良いところであり、在校生の自信になっていくといったことがあるのではないかと話がありました。実際にそういった傾向が声として出ていることでホッとしました。ただ、これが昨年度だけの単年度の取組といったことに留まっているということなので、できれば継続できるような措置を検討していきたいと思っております。

いかがでしょうか。これに関して御意見ございますか。もしなければ話を進め、最後にまとめて御意見を伺いたいと思っております。本日は資料についての説明と理解に時間を割きたいと思っておりますので、先に進んでよろしいでしょうか。

ありがとうございます。それでは、次第の(3) 専門学校・専門学科の今後の在り方について、こちらについて事務局から説明をお願いいたします。

事務局 関

ありがとうございます。今お聞きのとおり答申をいただいたばかりでございますが、急速な少子化が進む中で、現在の本県の専門高校の取組について、ぜひ忌憚のない御意見を賜りたいということで本審議会がおこなわれております。では、資料5を御覧ください。

資料5、県立高等学校将来構想実施計画でございます。こちらの内容については、たくさんあり駆け足になりますが説明させていただきたいと思っております。まず4ページを御覧ください。

本県は平成22年から志教育を推進しています。地域産業や行政と連携した特色ある取組を実践し、特色、魅力ある学びを推進して、専門学科教育の学びの充実に努めてまいりました。

また11ページを御覧ください。「魅力ある学校づくり」においては、「少子化の中でも地域の特性や生徒のニーズに応じた幅広い学びの在り方」という点で、学びや生徒の多様化に応じた学校の特色づくりに勤しんできたことがまとめてございます。

また、18ページには令和5年4月に開学した「大河原産業高校」のことも記載してございますので御覧ください。

さて、これまで専門高校・専門学科の生徒たちの取組を御覧いただいております。そしてこの計画に沿って事業を進めてまいりますが、少子化に歯止めがかからず、答申を頂戴したばかりではあります。委員の皆様から御意見を賜りたいと存じております。

では、資料6を御覧ください。こちらの横長のグラフは、少し驚くようなグラフとなります。折れ線グラフは中学校卒業生数の推計です。年によっては令和10年のように卒業生数が増えるなど、減り方というものが直感的に分かりにく

いところもございます。しかし、資料6のグラフを見ますと、今から9年後の令和14年以降には急激に減少しているということがよく分かるものになっています。

折れ線グラフの下、棒グラフの太線で示されたピンク色の部分が、必要学級数となっております。そして、そのピンクのグラフの上に積み上がっている網掛け部分のグラフが実学級数となっております。必要学級数よりも実際の学級は多く設定している状態でございます。例えば、令和5年度の時点では、23学級分の乖離がございます。必要数よりも23学級多く設定しているという意味でございます。

このグラフを見てまいりますと、令和19年度は全県で216学級あれば足りるというような状況に立ち至るといことが推計されるわけでございます。これまで専門高校・専門学科等は、地域に貢献し、様々な実績を上げてきたわけですが、この少子化の状況を踏まえ専門性を維持しつつ、また教育の機会均等と地域企業からの要請を入れつつも、どのように専門高校の単独校を配置するか、また適正な学校規模に配慮した専門学科を整備していくか、学校資源をどうしていくかということが喫緊の課題と言えます。

続きまして資料7の1、それから資料7の2を合わせて御覧いただくと分かりやすいと思います。

資料7の1は、県全体の専門学科・専門高校の配置状況、配置学科をまとめたものです。アイコンで色別になっておりますので、県内のどの辺りに、どういう学科が配置されているかというのが御覧いただけます。市立高校と私立高校も合わせて記しております。

また、資料7の2の方は、色のついている学校は単独の専門高校ということになっております。

各学校には地域産業を担う人材を育成するため、地域の企業や小中学校、さらには大学等との連携した取組を一層推進し、地域産業への興味関心を高める取組を行っていただきながら、県としては、適正な学校規模、専門性を維持した魅力ある学科の在り方の検討を課内で行っている最中でございます。その在り方の1つとして大崎東部職業拠点校について、本課の教育改革班から説明させて頂ければと思います。

事務局 熊谷

高校教育課、教育改革班の熊谷と申します。私から現在の専門高校の在り方の1つとして、大崎東部職業拠点校の進捗状況等について説明いたします。資料5の17ページを御覧ください。

大崎地区東部ブロック職業教育拠点校については、平成30年度に「大崎地区における高校の在り方検討会議」が開催され、松山高校、鹿島台商業高校、南郷高校の東部3校を再編し、地域のニーズを踏まえた魅力ある高校づくりを推進するため、職業教育拠点校として鹿島台商業高校の敷地内に新設するものです。

この再編を進めるにあたり、教育基本構想検討会議を開催し、具体的な学科構成、教育内容、教育施設等の検討を行い、令和3年5月に「教育基本構想」を策定し、この「教育基本構想」において、既存校に設置されている専門学科および学びを基本とした上で、基本理念として「食」をテーマとした様々な職業専門的学びを展開し、地域の資源を活用しながら、地域ブランドの創出化に取り組むものとし、設置学科については、既存校の学科を踏襲し、農業に関する学科1、商業に関する学科2、家庭に関する学科1としています。

なお、この再編により、松山高校、鹿島台商業高校、南郷高校につきましては、令和9年度に募集停止をし、令和10年度を以て閉校するものです。私からは以上です。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。ただいま事務局から、先ほどの資料6に基づいて、

急速な少子化が進んでいるという説明がありました。そのような中で、現在の本県の専門高校の取組について、また、専門高校の在り方について、皆さんから様々な立場で御意見を伺いたいと思います。いかがでしょうか。

感想でも結構です。今日で意見を出し尽くすということではなく、あくまで今日はキックオフのスタート時点です。これからおそらく1年ぐらいかけて、様々な議論をしていくこととなります。そういう意味では、そもそもこの資料の見方は「これでいいのか」、「自分はこう思っているのだけど」、「これは筋違いなのか」御意見、御質問でも結構です。いかがでしょうか。

皆さんが考えている間に私からお話します。例えば資料6の棒グラフを見ますと現在学級数が340ほどあります。その中で必要な学級数は310くらいで、現状はそれくらいで納まっています。1割とまではいかないが、78%が過剰となっています。それが今後15年くらい経つと急速に、その過剰な部分が大きくなり、おそらく様々なところから現状の産業教育の教職員数は本当に必要なのですかという声が出てくると思います。それには十分に対応しなければならないのですが、そういった声が出る前から自助努力の取組が必要であると考えるのが、この審議会の役割と理解しています。

日本全体の人口が減少していきます。経済力から見れば国内のマーケットが縮小するという事で、供給力も縮小する。ロボット化が一層進むことはあるにせよ、おそらく国内の産業力は縮小していく、縮小均衡のイメージです。

しかしながら、労働力が思った以上に減少するので、海外から特定技能等の制度で日本に来て働ける余地が拡大する、家族も呼び寄せて継続して日本国内で働く環境を整備しようという動きもあります。また、新聞紙上を賑わせている東北大学の来年度からの新しい取組についてですが、現在留学生が2,000人のところを3倍の6,000人にしていくことを目標としています。日本国内の少子化の中で、日本の大学進学率は高くなっていくけど絶対数は少ない。その中で優秀な人材を確保するために財源をとって留学生を今の3倍規模に増やそうというような考えもあります。同じようなことは宮城県に限らず、日本の産業教育でも学生数が少なくなるのだから、海外から優秀な学生を受け入れるということについても議論をしていく必要があるのではないかと、宮城県のデータをみながら、本当に縮小均衡の中で何が必要なのかということを考えなければならぬと思います。今、留学生の話をしましたけど、60歳定年についても同様です。定年の年齢が徐々に引き上げられていくなかで、リタイアした後に、新たな学び、新たなスキルを身に付けて、生涯にわたっていろんなところで自分の体力に合わせながら活躍していきたい、そういった社会人向けのリカレント教育を盛り込んだときに、資料6にあるような姿がもう少し緩和される可能性もあるのではないかと思います。そのことは今回の資料では十分に検討はされていないのですが、そういうことまで踏まえて、この審議会で検討したらいいのかどうかを事務局で検討していただければなと思ったところです。

皆さん、いかがですか。なかなか発言しにくいと思うのですが、だいたい時間もあと1時間くらいしかなくて、積極的に御意見を出していただければと思います。せっかくなので、経験値の高い今野委員いかがですか。

今野委員

はい。改めて今日の資料を拝見しますと、特にショッキングだなと思ったのは、資料4の2ページのところの表3です。就職希望されていらっしゃる方ってこれくらいなのでしょう。大体、右側の全体を見ると3割弱ということで、その次のページの表4を見ますと内定率は非常に高いということは、残った方々は、進学されていらっしゃるのだろうなと思われれます。そのように考えたとき

に、産業高校で学んでこられたものを更に上の勉強をされるということだと思いますが、県内でこうやって考えてみると、もちろん東北大学のように非常に高度な研究をされていらっしゃるところもありますが、せっかく学んだものが上手く大学教育のところに引き継がれているのかなと疑問があるところです。また、勉強不足で申し訳ないのですが、これはどちらかという質問の部分になるのですが、宮城大学との科目的な連携などは意識されていらっしゃるのでしょうか。

今日のところを拝見しまして、少子化はこれから進んでいく。そうすると、おそらく大学も定員割れになるところが多々出るというように報道されていますので、もちろん、中学校との連携というのも非常に大事なのですが、その出口のところも少し意識するべきという印象でした。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。資料4の2ページについて今野委員から発言ありました。全体で3割弱の就職希望であり、普通科だと1割ないし1割少々就職希望といったことで、全体が3割弱になっていると思います。産業高校になりますと、おそらく5割から6割近くの数にはなるかと思いますが、その約半数近くが産業高校でも進学希望です。

それから質問の部分に関して、いかがでしょうか。事務局で何か答えられる点はありますか。

遠藤課長

宮城大学との結び付きというところについては、先ほどの資料4の2ページでございますとおり、多くの学科において、進学を希望している生徒というものが増えてきているという状況でございます。その中には、一般入試を受験する生徒もおりますけれども、一方で、いわゆる総合型選抜、あるいは学校推薦型選抜で受験をしているという生徒も多くいます。いずれにしても高校側としては、生徒たちの進路というものが達成できるようカリキュラムも含めて工夫しているところでございます。

先ほどお話をいただいた、あまり就職希望者が多くないというところでございましたけれども、資料2を御覧ください。昨年5月にいただいた答申の3ページの上段に帯グラフがございます。資料が白黒になって見づらいところで申し訳ないのですが、そちらが学科ごとの進路状況を表したものでございまして、農業にしても工業にしても商業にしても左側から3つ目までぐらいが進学という状況になっておりまして、農業、工業においては三分の一ぐらいの生徒が専門学校も含めて進学をしております。商業の場合ですと半数が何らかの形で進学をしているという現状にあるという点について理解をいただければと思っております。

なお、宮城大学との連携については、生徒たちがその大学に進学するというのとは別に、宮城大学で近年、特に地域との連携というものを重視されています。その中でも特に起業家教育、アントレプレナーシップに力を入れておりまして、本県でも多くの学校が宮城大学から様々な御指導をいただきながら、地域の課題研究等に取り組んでいます。普通高校だけではなく、専門高校でも起業家教育等に取り組んでいます。その後すぐ就職するのか、あるいはもっと深めたいと思います、進学するのかということについては、生徒個人の判断ということになりますが、そのような大学と連携した特色ある取り組みなども実際におこなわれているという状況でございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。他いかがでしょうか。御意見、御質問がある方は御発言をお願いします。

高橋委員

情報があったら1つ2つ教えていただければと思います。大崎地区東部プロ

ック再編の御説明を受けました。「食」をテーマとしたということですが、異色の3校が集まって「食」をテーマに掲げられたことは、私どもの業界にとっては大変ありがたいと言いますか、関心事でありまして、テーマを設定するにあたり何か背景的なものがあつたのであれば教えていただきたいのが1点です。それから、登米市の産業高校が前例としてあり、6・7年前になると思いますが、再編のノウハウや課題が、今回のこの構想に生かされているものかどうかをお聞きしたいと思ひます。

議長 伊藤会長

いかがでしょうか。

事務局 熊谷

はい。私から回答させていただきます。先ほどの平成30年における在り方検討会議の中で「50年後、100年後を見据えた学校づくり」または、「醸造や発酵等、大崎の資源等を活用した学科の設置」、「将来入学する生徒にとって魅力的な学校」といった意見を踏まえまして、学校の方向性について検討をおこなつた結果、「食」をキーワードにしたところでございます。

「食」をテーマにした理由の1点目としては、大崎地域は世界農業遺産に認定されているなど県における農業の中心地であり、醸造など「食」関係の製造業も盛んでありますので、地域の特性を十分に生かしながら、地域と協働した魅力ある学びを展開できることを期待して「食」とさせていただいております。

2点目になりますが、変化のスピードが速く先が見通せない時代の中においても、常に生活の中にあるのが「食」であると考え、また、この「食」については、身近な日々の食卓から、世界規模での「食」のサプライチェーンまで、様々な切り口に接することができるということで「食」とさせていただいたところで

議長 伊藤会長

よろしいですか。他いかがでしょうか。佐藤委員お願いします。

佐藤委員

はい。今の質問に関連するのですが、私もなぜ「食」なのかということを疑問に思つておりました。今、お話を聞いて分かつたのですが、その中で醸造、発酵というワードをお話しされたと思うのですが、なぜそういう学科が入っていないのか、まさに今、醸造や発酵、チーズを作るとか、地酒を作る等、今のトレンドだと思ひます。そういった学科があると魅力的になるのではないかとということと、もう1点が、設置学科で商業に関する学科が2学級となっておりますが、なぜ商業が2学級で農業が1学級なのか、むしろ農業の方を手厚くすべきなのかなというように思ひました。商業でも例えば、情報と商業が一緒になっているのであれば、今の時代に合つていると思うのですが、そのあたりについて教えていただきたいと思ひます。

議長 伊藤会長

よろしくお願いします。

事務局 熊谷

はい。まず醸造につきましては醸造科というものを設けずに、農業科において醸造類型を設置し、その中で醸造について学ぶこととしております。また、各学科の設置する学級数ですが、基本構想を策定するにあたり、当時の鹿島台商業高校、松山高校、南郷高校の各学科における充足状況を踏まえ、商業については2学級規模、農業と家庭については1学級規模にさせていただいております。

議長 伊藤会長

よろしいですか。ここに観光があつてもいいですね。山内委員からお願いします。

山内委員

はい。どうもお世話様です。宮城教育大学の山内と申します。どうぞよろしく

お願いします。

先ほど伊藤先生からリカレント教育のお話がありましたが、大崎地区の話があったので、学び直しの観点からお話しします。リタイアしたり、あるいは大崎の地域や移住した方たちと話をしたりしたことがあるのですが、今1,000人くらいと移住者がかなり多いということです。しかし、地域的な課題として、せっかく移住して来てくれた方に空き家等を紹介して、定住促進のようなことおこなっているが、その後のケアができていないということでした。多くの人たちは農業など家庭菜園的なものですが、それをやりながら暮らしていきたいと考えているのだけれども、如何せん知識が不足しているということでした。そういった移住してきた方々をどう6次産業に繋げていくか、どういう学びを与えていけるかというのは、これからの産業教育ということを考えたときに、少しヒントになるのかなと思います。外からの移住者の再教育と言いますか、リカレント教育みたいなものは、何か事例などご存知であれば教えていただきたいと思ったところです。

議長 伊藤会長

事務局で山内委員からの質問に回答できそうですか。

遠藤課長

はい。移住者をどう移住させるか、また、そのためにリカレント教育が必要であるというところですが、高校教育の枠の中では私どもとしてもなかなか自信を持って申し上げるところは難しいところでございます。高校教育の場については、今いる中学生たちを高校に入れ、その生徒たちをどう教育するかということになります。そこに、様々な枠組みの1つとして、例えば、定時制高校等に通学しながら働いている生徒が学び直しとして、学び直すことや、あるいは科目履修をするとかについては、実際におこなわれているところではあるのですが、移住してきた方を学び直しの場として、高校生と一緒に授業を受けるということになると、また別な枠組みの検討が必要になると感じたところでございます。

議長 伊藤会長

もう少しありますか。どうぞ。

山内委員

はい。例えば、佐藤先生がおっしゃったようにお酒を造るというような学科であれば、例えば地域の方がその施設設備を使えるとか、特定の単位を履修できるとか、学校と地域の人たちが接点を持ちながら動かしていけるかということを考える必要があると思います。これだけ少子化が進み、併合などを考えていかなければならないという局面になっていくとき、その学校のキャンパスをどのように使っていけるか、それから地域的な課題をどのように解決できるのかというところを考えていかなければならないと思います。私も教育大学なので、もちろん子どもたちの教育ということは第一ですけれども、様々な局面とは大きく状況が変わってくるということもあり、しかしながら産業も守っていかなくてはならないという中で、どういう舵を切れるのかということをお伺いしたかったところです。

遠藤課長

地域の方々と協働しながら、様々なお力をお借りし、産業教育を進めていくという必要性については、昨年度も答申をいただいた中で触れられておりでございます。我々としても今後、様々な形で進めていきたいと思っております。

先ほど触れさせていただきました資料3の最後10ページ横置きとなっております資料がございます。「産業教育次世代人財育成プロジェクト」という今年度から始めている事業で、まだ途中経過ですが、こちらについては、まさしく今お話がございましたとおり高校を中心としながらも、その地域の産業界の方、あるいは大学関係者、あるいは自治体といった方々とのコンソーシアムの中で、

子どもたちの学びというものを地域と一体になりながら進め、地域で求められる産業人材を育てていくというようなことを考えている事業でございます。これは今年度、石巻地区で推進しようということで準備を進め、コンソーシアムの構築まで何とか進めているところでございます。こういった取組を地区ごとに、コンソーシアムを形成しながら、地域の方々の御支援をいただいて、子どもたちに必要な資質・能力を育てていくというようなところは、これからますます重要になってくるのかと思っております。1つの事例として紹介させていただきます。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。よろしいですか。山内委員の御質問、御意見ですが、先ほどの今野委員から出口を考えた今後の教育体制の在り方について検討する必要があるといったところもおそらく関連していると思います。想定している産業高校の生徒は、卒業後に就職でフルタイムの労働者というような位置付けで考えると、やはり単位や資格をどう学び、取得するかをしっかりと考えなければなりません。しかし、産業界の方からこの地域でパートタイムでも関わってくれる人が必要だといった部分に関しては、産業高校の施設とか、その教育資源を上手く使うことで、地域に必要な人材育成をリカレント教育も含めてやれるのではないかということだと思います。そういったものを上手く組み合わせができるかどうかといったところは、また検討してもらうことにしていきたいと思えます。他いかがでしょうか。小嶋委員お願いします。

小嶋委員

はい。今の山内委員の御意見についてですが、高校教育課と経済商工観光部は連携をしまして、いわゆる地元企業の高校生の見学会というのは、これまでもおこなっております。昨年、コロナ禍の影響もありましたが、昨年度は12校で引率を含めて572名、延べ31企業で実施しました。例えば村田高校であれば9月の半ばに地元の企業を2つ見学するといったようなことを県内各地の地方振興事務所と協調しながら実施しております。

今年度は、コロナが5類になったことでもありますので、28校で実施の予定にしています。授業というよりも授業の外になるかもしれませんが、そういう形で地元企業をできるだけ高校生に知っていただきたいということをしております。それからクラフトマン21事業とあって、ものづくり現場実習という事業も同様に教育委員会と一緒におこなっております。先ほどの山内委員の御意見に近いかもしれませんが、会社の設備ではなく、例えば溶接であれば多賀城にポリテクセンターがあり、その施設を使って溶接を教えられる現代の名工などにお越しいただいて、各学校で希望をされる方、どうしても施設の関係で2、3名と少なくなりますが、学校の先生も交えながら場も設けております。ポリテクセンターだけでなく、企業の施設自体も使ったその製造現場過程というものを見学することも小規模ながら実施はしております。

議長 伊藤会長

詳しい情報ありがとうございます。他いかがでしょうか。それでは半沢委員からお願いします。

半沢委員

はい。半沢です。4月に中央会の方に参加しました。元県職員でしたので、県職員だったときの経験を踏まえて何点かお尋ねしたいと思います。

1点目は、4月に労働局の会議に出席したときに、県内の高校を卒業して就職を希望される方が2,400名であり、それに対して県内の企業の求人が1万人という状況でした。求人倍率が4倍を超えるということを初めてそのとき知りました。新卒者は金の卵なので、まず中小企業中央会としては、県の産業教育に大いなる期待をしているところでございます。その中でお尋ねしたいのですが、産業教育、専門高校・専門課程を受験される生徒の皆さんの動機というのはどん

なところなののでしょうか。仮定でお話して申し訳ないのですが、宮城県内の中小企業が、例えば、採用の中心を高卒だとした場合に、産業教育を目指す方は、県内で就職したいという動機があって産業教育を目指されているのか、あるいは自身が住んでいる地域の中で行ける高校という選択肢で選んでいらっしゃるのか、仮に前者であれば、先ほどの専門高校等の魅力発信イベントを昨年度一生懸命やられたということで、そこに県内の中小企業もコミットし、このような受け皿がありますと、実際にこのような企業で採用されて、こんな仕事をしていますということを合わせて発信できるのであれば、産業教育、専門高校をより積極的に選んでいただけるのかなというように感じたのが1点でございます。

もう1点は、先ほど金の卵というように申し上げましたが、相当程度の割合で就職された方が離職されてしまうという現実もお伺いをしました。それが今、職業意識、就業意識が変わってきて、新しい選択肢を求めて離職されるのか、あるいは企業側にも原因があり、企業とその生徒が上手く合わなくて辞めてしまわれるのか分かりませんが、やはり相当程度が離職されるという方が、どういった社会人としての歩み、職業人生を送られるのかに興味があるところです。そこはもしかしたら、この場での範疇ではないのかもしれませんが、私の立場としては非常に気になっているところでございます。まずは感想ということで、その2点でございます。

議長 伊藤会長

貴重な御意見ありがとうございました。今の半沢委員の御意見や質問について答えられる部分はありますか。

遠藤課長

1点目の専門高校等を受験する動機については、なかなか把握できていないところでございまして、おそらく家庭的なところ、親の意見も含めてということになりますし、あとは経済的なところということもあるかもしれません。様々な要因があるのかと思いますが、そこまで我々としても特定できる情報は持ち得ていないところでございます。申し訳ございません。

なお、御提言のございました魅力発信イベント等で、その地域の多くの企業とコラボするというのは大変興味深く拝聴したところでございます。実は昨年の魅力発信イベントにつきましては、地域ごとに学校を中心に実行委員会の形式を組織化しまして実施しました。それを今年度どうするかということについては、その地区ごとの実行委員会に委ねているという状況でございまして、教育委員会もある程度、音頭を取るということにはなりますが、その実施については、その地区ごとにお任せをしているという状況でございます。仮に実施をしていきたいというようなところが、今後出てきた場合には、頂いた御意見等もしっかりと伝え、様々な企業とタイアップしながら良いイベントができるように努められればと思った次第でございます。

それから離職の状況についても、理由はまちまちというところでございまして、直近のデータでは3年以内に離職する割合は、本県は全国値の37.0%よりやや低い数字となっております。その主な理由といたしまして、1つは仕事が合わないというところ、あとは能力的についていけない、きついというところ、それから、労働条件において、自分が想定していたものと違っていたというところなどが挙げられているところでございます。その後の状況についてのお話がございましたが、当課では経済商工観光部等と連携をしながら、地学地就コーディネーターを、就職者の多い学校に配置しております。このコーディネーターが多くの企業を訪問し、学校と企業を繋ぐ役割を担っています。そこで卒業生の離職の情報なども得て、場合によっては、学校につないで様々な情報を提供し、再就職に持っていくというようなこともあります。コーディネーターが早期離職を少しずつ減らすということと合わせて、再就職に向けた役割なども果たしていただいているところで、少しでも離職してしまい何もできていないという方

を減らすように努めているというところでございます。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。半沢委員の方で今の回答に関連して、もう少し何かありますか。よろしいですか。

はい、では後藤委員からお願いいたします。

後藤委員

はい。私の方からは、半沢委員の御意見も踏まえて、魅力発信についてと受験者の動機についてですが、中学生が実際どういう産業関係の高校があるかは、なかなか知り得ないので、とりあえず普通科に行こうというようになる中では、魅力発信を中学校とどのように協働していくかということも1つだろうと思います。その先の大学等の関係も含めて、それから、更には企業も絡めて魅力発信を高校単体ではなく、中学校の子どもたちが知る機会や進学してどのようになるか、あとは企業にとってはどのようになるかという全体像を示すと良いと思います。

また、離職の話においても、例えば、どのような条件なのかなどが繋がっていくと、全体像が見えるのではと思います。特に最後の報告会というところについては、それぞれどんなイベントをして、どうだったのかということを中心に自分の言葉で語り、その場には企業や中学生、高校生、更には先生方がお見えになり参画することによって全体が見えてくるようになると思いました。せっかくの機会を今年度は各ブロックに任せていることになっているので、そこも検討したらいいのではと思います。

私のところだと福祉の分野で、今年、認知症基本法という法律ができ、行政の取組課題というのもあり、大学生がどう取り組めるかという場面において、高校と何か、高校と言っても別に福祉でなくても工業で何ができるかということも含め関係を持つこともいいのでは思いましたので、少し御意見というか、感想も含めての発言でした。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。他いかがでしょうか。徳能委員、先ほどとは違った御意見があればお願いします。

徳能委員

はい。専門学科といっても、おそらく学科ごとに様々な特色とか、それから取組が違っていると思います。私が行政にいた時期には、クラフトマン21を担当していたのですが、やはり工業高校は素晴らしい取組を工業会全体が全面バックアップをしてやってくださっていること、また、注ぎ込まれる予算も他の学科よりも大きく、設備等が高いので、そういうことになると思うのですが、大変羨ましいというように思いました。私も様々な学校に赴任しましたが、工業系列に中学校から入ってくる生徒は、やはり資格をきちんと取得し、そして就職をしようという意識が高い生徒が多かったというように思っております。それに対して、その他の学科はそこまで資格を取得して、すぐ就職に結び付けるところまで直結している感じを受けなくて、やはり学力的なところとか、就職するということは念頭にはあると思いますが、具体的なイメージがなかなかつきづらかったと思っております。

もう1つ、この議論からは少し外れてしまうかもしれませんが、学校の現場にいる者として考えるのは、クラス数のところでは、今の基準の40人を定員としたクラスで考えればというクラス数であって、実際にはもう少し人数が少ない方が、特に産業教育などでは良い教育ができるのではないかと考えています。これは国が定数を決めているので、県として決めるということ、産業教育の適正な定数を考えることはなかなか難しいと思っています。

また、新しい大崎地区の学校についても、以前は松山高校に赴任していたので、議論は大体知っていますが、そのときにも話題になったのはアクセスの良さ

というところですが。鹿島台商業高校の跡地に建てられるということで、駅からは相当遠いということになるだろうかと思います。その中で全県から生徒を呼び込むというのは、やはり私は難しいのではないかと思います、そのときにも意見はぜひぶんだのではなかったかと思っています。これが鹿島台駅からの近場であれば、全県から生徒を呼び込むことができ、食産業というのに関わりたいたいというか、食産業を学びたい生徒が県内各地から来るということも、もしかしたら考えられたのかなと思っています。もう進んでいることなので、場所を変えるということではできませんので、スクールバスとは言わずとも、何かしら駅からのアクセスが改善されるような、あるいは学びの場所は別に1つでなくてもいいと思うので、様々な取組をおこない、せっかくの学科ですので、全県から中学生が興味を持って入学するような学校になると、新しい学科をつくるメリットがあるというように思っています。アクセスが悪いから人が集まらないというのが残念なことだなというように思っています。

議長 伊藤会長

ありがとうございました。これで大体一巡したかと思いますが、一巡で済まないで二巡目にいかがですか。せっかくの機会ですので、これは聞きたいとか、こういう考えはどうだろうかとかありませんか。まだ、時間的にはありますので、それでは小嶋委員からお願いします。

小嶋委員

先ほど、昨年度の答申を踏まえて、各専門学校の取組を資料3で拝読し、イベントが開催されたのが10月、11月ということで、もし、このイベントの成果がしっかり出たとするのであれば、資料4の進路状況の倍率のところ、10番の商業や11番の水産、福祉もですが、令和4年度の倍率が上がっていますので、成果があったと思って見ていました。

また以前、私は食産業振興課におりまして、宮城大学などで講義をするだけではなく、お弁当コンテストというのをおこなっています。部活動になりますが、やはりそこに関わる高校生の方々が、地元の農家と話をするとか、栄養素を考える活動の中で献立を考える取組で、生徒は様々な才能を持たれているなというところを、個人的には感じています。一方で今年、経済商工観光部に着任し、半沢委員からあった労働局の話は、まさにそのとおりで、どうしたら1度宮城を離れた方がどうしたら戻ってきてくれるのだろうかとか、離職した3割の方が、我々でいうジョブカフェから情報をしっかり取ってくれるのだろうかというところは、個人的な課題にはなっております。

議長 伊藤会長

ありがとうございます。この審議会でも何年か前に話題になりましたが、IターンとかUターンの人たちに、なぜ向こうに行って、何でこちらへ戻ってきたのかを1度調べたら良いと思います。きっちりデータとして取るには大変だと思うのですが、卒業生を対象に、データを集めておくとも良いと思います。また昨年の魅力発信の取り組みも今日いろいろ皆さんから意見を聞いて、商工関係の方から今野委員、中小企業団体中央会から半沢委員、漁業関係では三浦委員は本日お休みですが、農業関係は高橋委員が出席されています。それぞれの産業界の方々の方でも良い感触を持っていただいているようですので、ぜひ全体の業界団体にも繋いでいってほしいと思います。

他、いかがでしょうか。どうぞ半沢委員からお願いします。

半沢委員

先ほどと別の視点になりますが、県職員だった頃、企業訪問というのは知事の号令の下、経済商工観光部の職員は、ほぼ企業まわりをしていたという経験と、4月以降の聞いた話で申し上げますと、今後、学科の再編なり統合なりということが議論の1つになるかと思いますが、案外ローテクが企業側では求められているのではないかなというように感触を持っています。これも県職員のときです

が、県南、仙南では、真空チャンバーという半導体製造装置の枠を作る会社があり、それは10cmぐらいのステンレス合金を溶接して真空状態にするものです。それで、たまたま伊具高校に溶接を学ぶ学科があり、その生徒が毎年何名か就職していました。何となく溶接というとローテク、もうなくなりつつある技術みたいに思っていたものが、実は半導体製造という最先端の製品の中で生かされていることを見聞きした話としてございます。

あともう1つ、どうしても「3K」ということで体を使う仕事が敬遠される傾向がございませぬけれども、やはり機械化、ロボット化を進めていったとしても、どうしても人手に頼る仕事は残っていき、例えば、建築の現場であれば、基礎を作るときの型枠であるとか、あるいは左官とか、目まぐるしく産業構造が変わってきていますが、その中でも必要とされる技術というのはあるのではないかなというように感じています。それも今後の議論の中で御検討いただければありがたいと思っております。

あともう1点、これは中小企業の話と別なのですが、先ほど山内委員から移住者のお話を伺って、実は中小企業組合連携組織の枠組みが何年か前に変わり、特定地域づくり事業協同組合という制度ができました。マルチワーカーを組合で雇用していくという仕組みですが、残念ながら今のところ県内では気仙沼地域に1組合しかありません。こういった取組を中央会としても進めていきたいと思っております、来月下旬ですが、県北で1か所、県南で1か所。市町村の行政の皆さんにもおいでいただいて、特定地域づくり事業協同組合の制度について説明会を開こうと思っておりますので御参考までにといいことでよろしく申し上げます。

議長 伊藤会長

貴重な情報ありがとうございました。他いかがでしょうか。大体よろしいでしょうか。

特にまとめる必要はないのですが、皆さんの御意見をお聞きしていると、私にはまだ分からないところがたくさんあると感じました。分からない点は、今の中学生や高校生が将来、自分が働きながら生活するイメージをどのように描いているのだろうかということです。皆様、日々接している学生からそういったところは感じているかと思うのですが、少なくとも私の周りや、時々お世話になっている霞が関の人たちを見ても、次々と若い人が霞が関を辞めていると。それで何をしているのだろうかと思っていると、土いじりを始めたりしている。かつての国家公務員のキャリア組に魅力を感じない。このままここで働いていて自分はいいのだろうか、耐えられそうもないということでスパッと辞めてしまう。一方で、様々なことにチャレンジするスタートアップ事業を現在、国が一生懸命財政的にも手厚く支援しています。それで上手くできた人はいいのですが、それで上手くいかなかった人は、どういう再チャレンジがあるのだろうかと考えることがあります。何度でもやり直せる、今は全然違った仕事ですごく楽しく、それなりの生活も十分やれているという様々なロールモデルがあるといったことをどうやって中学生やその保護者に理解してもらおうか。もう少し広範に言うと、私を含め日本の社会で働くモデルが、ずいぶん変わってきているはずだと思います。少なくとも私が中学生や高校生のときのモデルはもう消えてありません。ヨーロッパやアメリカの産業教育のような様々なモデルを見ても、やはり国ごとに違っています。オランダでは、中学生の頃から職業選択でそのまま大学向けの進学コースと中学からすぐ高校に行かずに働く、高校に行ってから働くなど何段階もあり、働いているけど、もう1回学び直したいと思えば、きちんと入り直せる仕組みがあります。それが上手くいっているかどうかは分かりません。農業関係でも国ごとに違いますし、ドイツやフランスでもそうですが、一定のマイスターやマイスターの一步手前の資格を持っていると様々な国の助成金を受けやすくなります。だから先ほどの今野委員にしろ、半沢委員にしろ、高橋委員に

しろ、産業界からこういった人材が今必要ですと、そのためにはこういったことが必要ですといったメッセージや情報なども、魅力ある情報発信の場にまとまってあると産業高校を受験しようという保護者や子どもたちも出てくるでしょうし、在校生もそういうことなら、自分はこれからこういうことに取り組もうと気づくでしょうし、そのような機会が現在十分にあるのだろうかということに繋がっていくと思います。

そのような中でもう1つ、これは産業高校側ではなくて、産業界の方としてですが、例ですけれども、来年の4月に山形県で農業大学校を改組して東北農林専門職大学が新しく設置されます。そこではカリキュラムの半分くらいが山形県の農業法人で実習をおこない、座学と実務について両方を学び、農場長や農業経営者になる人材をしっかりと育てることを考えているそうです。カリキュラムがはっきりしていると送り出す側もおそらく送り出しやすくなるのではと思います。これは産業界全体がそうなのではないかと思います。後藤委員が話された福祉も、福祉では今、こういう人材が本当に必要だとか、そのために様々な資格もあると、しかし、そのような資格は取れないけど、サポートであれば自分は関わると、1週間フルではなくてもパートタイムではできるなど、そのようなメッセージとといいますか、情報がたくさんあると良いのですが、そういったところが十分に整理されていないのではないかと思います。「産業教育、学校のカリキュラムはこれです」と、そのための学科や学級数はこうなりますと結果的にはなると思いますが、本当に必要なことは何かといったあたりから検討していくと、徐々に必要なクラス数、それから先ほど徳能委員からありましたが、クラスを40人基準にしているけど、そこは特例を認めてもらえるようなエビデンスみたいなものも出しながら、県として取り組んでいく必要もあるだろうと感じました。ただ、財政的な問題があることも併せて感じさせていただいたところです。

冒頭の方でもお伝えしましたが、今日、皆さんからいただいた意見で終わりではなくて、これを基にキックオフの形でこれから時間をかけて何回か検討していくと思います。そのことについて事務局から説明があると思います。我々がすべて検討するのではなくて、専門部会を設置し、その専門部会で鋭意、現場サイドの方々が中心となって検討していただきますので、そこで揉んでもらいながら専門部会と本審議会でキャッチボールし、より良い提言案といったものを作っていくといたるところになります。

以上ですが、よろしいでしょうか。ここまで何か確認したい点はありますか。よろしいですか。それでは時間になりましたので、本日皆さんから非常に有益な御意見いただき、感謝申し上げます。私の役割は本日ここまでといったことで、ここからの進行は事務局にお返しします。どうもありがとうございました。

5 その他 (進行)

事務局 伊藤総括

伊藤会長、どうもありがとうございました。それでは次第の5番目、その他について事務局からお願いします。

事務局 関

ありがとうございました。では、資料8を御覧ください。

令和5・6年度宮城県産業教育審議会のスケジュールということで示してございます。こちらについて御説明いたします。今、伊藤会長がまとめてくださったように本審議会もスピード感をもって対応してまいりたく、少し窮屈な予定となり委員の皆様には大変ご迷惑をおかけするところでございますが、今年度後2回、審議会を予定してございます。

第2回審議会でございますが、12月19日の火曜日を予定しております。場所は、今年度開校しました大河原産業高校の視察とその後、高校を会場に審議をさせていただきたいと考えております。

第3回は、2月中旬を予定しております、こちらまだ日程決まっております。

せん。令和6年度でございますが、令和6年度末の提言提出を目指したいと考えておりますので、専門委員会を立ち上げ、詳しい調査研究を挟んで提言を提出できるようスケジュールを組んでおります。専門委員会につきましては、この親委員とは別に学校現場からと産業界の有識者等を入れてメンバーを組みたいと思っておりますが、こちらについてもまた審議させていただければと思っております。

大河原産業高校の視察でございますけれども、県庁から公用車で現地に向かう予定でございますが、現地へ直接お越しいただいても構わないと考えております。詳細につきましては、後日ご連絡させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

本日は時間がないところですが、委員の皆様から様々な意見を頂戴いたしまして、誠にありがとうございました。発言しきれなかったことやお気づきの点がありましたら、お配りいたしました意見用紙に御記入の上10月31日までにファクシミリまたはメールでお送りいただきますようお願いいたします。

**6 閉会
(進行)**

事務局 伊藤総括

その他、何かございますか。それでは本日は貴重な御意見をいただきありがとうございました。以上をもちまして、令和5年度第1回宮城県産業教育審議会を閉会させていただきます。本日はどうもありがとうございました。

